

# 三八度線を越えて

吉田 勝

大和町四丁目

昭和十九年暮、満州国の士官学校に入学した私は、翌年八月敗戦でソ連軍の捕虜となり、南嶺（現在の長春市）に收容されましたが、九月同收容所を脱出、安東市まで南下しました。

以来一年余、ソ連軍の略奪暴行、日本人避難民の悲惨な生活等を目のあたりに見、また体験しました。これらについては幾多の体験記録があるので割愛し、以下、引揚げのため安東を出発してから南鮮に入るまでの体験を記述します。

昭和二一年秋、中国の内戦は益々激しさを加え、優勢の国民党軍は、私達の住む安東市に日一日と迫っていた。

敗戦後ひたすら引揚げを熱望している日本人に、突然「船で南朝鮮經由の帰国を認める」と市政府から許可が出され、同時に経路、出航日、船賃等も明らかになった。

十月二二日早朝、指定された鴨緑江の河原には何千人もの日本人が集っていた。

乗船者と名簿の照合は予想外の時間がかかり、乗船出来たのはもう夕方だった。

鴨緑江は大小様々な船で埋め尽くされ、自分の乗った船は小型の木造漁船で、四〇人も乗ると船倉はもちろん甲板も超満員になってしまった。

衝突の危険があるので船は静かに河の中央部に進み、そのまま錨を下ろした。

夜半、砲声が急に近くなり、街の方を振り返ると火の手が何か所からあがり、それをきっかけに市街地から次々爆発音が轟き出した。

中共軍の都市撤退作戦だった。逃げ遅れた日本人だろう、岸辺で助けを求めている大勢の人影が火災にくっきりと浮びあがったが、どの船も助けには行かなかった。

翌日、船は流れに任せてゆったりと河を下り、夕闇が迫る頃、漸く河口を遠く望める場所に到着した。「あと三〇時間で南鮮です。河口付近は暗礁が多いので明朝出発します」。朝鮮訛の日本語で船員の説明があった。

翌朝、一步外洋に出ると、風がひどく船は大揺れにゆれ、座

っている甲板にも容赦なく飛沫が叩きつけ、船倉の中は女子供が嘔吐し、転がり、熱気と臭気で全く此の世の姿とは思われなかった。

船は昼前、ようやく島影の入江に入った。間断なく外洋を走り抜ける波浪を見て、誰も荒天の出航を言い出す者はなく、濡れた衣類をしぼって着込むと、黙って座り込んだ。もう体温で乾かす以外方法はなかった。

船は錨をおろしたまま二日間暴風の回復を待った。三日目、海は風なぎ、南風が吹いていた。船は陸地と殆ど直角に進み、そして沖からまた陸地へと。しかし、二日間停泊した島は目前にあり、一日中繰り返してもその島を望むことが出来た。

三寒四温の正確さ……とすると、あと四日間は南風で南下出来ない、南鮮まで長時間かかるぞ……と改めて覚悟した。

しかも食糧は底をつき、水さえ全くない。オーバーを被り甲板に座って消耗を防ぐことだけ考えていた。飢えより乾きがひどく、口中がネバネバして話すのも億劫だった。水を飲まないで死ぬ……強迫観念におそれ海水を飲んだこともあった。

ある夜、待ちに待った小雨が振り出した。全員甲板に上り、口をあけて一滴でも多く飲もうと待ち受け、本降りになると帆を横に広げ、我れ勝ちに口を付けて吸った。しかし満足する前に雨は止んでしまった。

翌朝ついに死者が出た。海上で雨に濡れ、十月末の寒気にさ

らされ、病気にならないのがむしろ不思議なくらいだった。

虚ろな眼差しで座り、衰弱し切っている同胞の顔を見ながら、「俺が死ぬ前にこの大半は死ぬだろう……」と考え、少しでも生きる自信を見つけ出そうと努力した。

ついに待ちに待った北風が吹き出した。船は帆一杯に風をはらみ、滑るように進んで行く。鎮南浦の沖を通った時、仰向けになった女の子の死体がすぐ近くを流れて着た。これを初めに二〇体前後の死体が遠く近く流れ来ては去った。そして大黒丸の船名のブイも……。ふと「運命」という言葉が浮んで消えた。一夜明けるとまた幾人かが死んでいた。快調な船足に、水葬にした死体はどんどん遠ざかっていく……。

突然、銃声が響き、一隻の巡視艇が近づいて来た。舳先で機関銃を構えている。

やがて、兵二人が同胞の中に分け入り、手当たり次第荷物を巡視艇に放り投げると、去って行った。アツという間の出来事だった。

「あの岬が三八度線です」。船員が大声で叫んだ。いよいよ待望の南朝鮮だ。近づくに沖に向って白と赤の標識が見える。その時、岬の陰から巡視艇が現れ、全速力でこちらに向って来た。船は急速反転してジグザグコースで逃げ、島影に入ると錨を下ろした。

北朝鮮籍の船なので、南鮮側に拿捕されるとの説明があった。

夜半、「今から南鮮に入り上陸します。上陸は迅速に音をたてないで……」と説明があり、間もなく船底に何か引つ掛かる音がして船は停った。陸地が黒々と広がっている。

皆無言のまま次々に上陸した。

急に力が抜け大地に寝ころんだ。大地がゆっくり左右に揺れている感じがいつまでも続く。綺麗な星の輝きが印象に残った。いくらか眠ったのだろう、荷物を抱えて寝ている者、目を覚まし放心したようにほんやり一点を見つめている者達を見回した。頼りになりそうな若い男はいなかった。

立ち上がって地形を見た。小さい入江の窪地に同胞がほうり出されている感じだった。

岡の向こうはどうなっているだろう……。木の全くない岡の上立つと、同じような丘陵がいくつも重なっており、幾つか先の岡の中腹に道らしいのが見えた。あそこに行けば人家に出られる……。これだけ確認すると水を探し、小川を見つけて存分に飲んだ。久し振りの満腹感だった。

同胞の場所に戻ると、男達が集って相談し、佐藤さんがリーダーに決っていた。

佐藤さんの合図で歩き出したのは暫くしてからだった。一息ついて幾らか気力が出たとはいえ、行進は全く抄はかどらない。

岡を越えた所に農夫がいた。聞くと、ここは三八度線の北側、北鮮区域だった。

全くノロノロ歩いている。体力が極度に消耗しているので無理はないが、自分には、右手に入り込んでいる入江を眺め、美しい景色だと思っただけの余裕があった。

集落に近づくと、子供達が駆けよって来た。入口には大勢が集まっており、歓迎する顔でないのはすぐ判る。

「とまれ」。男が両手を広げて立ちはだかった。どこから来たか質問された。

「安東から日本に引揚げの途中です」。佐藤さんが神妙に答えると、男は急に居丈高になり、「米帝国主義の下になぜ帰るか。我々と共産主義国家建設に共に努力しないか」と、アメリカと日本の悪口をぶちまけた。

長い演説だった。二、三人が倒れた。ここで死なれたら面倒になると思ったのだろう、急に話が纏まとった。彼らは衣類を欲しがっていたのだ。同胞はリュックから一点ずつ取り出して重ね、最後に朝鮮人民と日本人民の万歳を叫んで集落を通過した。

次の集落でも同様のことが起こり、同じ方法で切り抜けた。無事通過させてくれた集落もあった。

少し歩いては休み、また歩き出すといった歩行では、行程は全く抄はかどらない。全員が体力と気力を試している様に、ふらふらと足を動かしていた。

小川の側を通った時、前の休憩から幾らもたないのに、皆座り込んで誰も動こうとはしない。

若い農夫が来たので、三八度線までの状況を聞く事が出来た。彼は日本に好意をもち、「自分が案内すれば良いが出来ない。道は細いが入江沿いに道があつて人家も少なく近道だ」と教えてくれた。

この小道と地形を確認するため、入江の見える台地の端まで行き、対岸を見た。対岸は目前にあつて、家々も人さえも見分けられ、山の稜線がくつきりと青空にそびえていた。入江は左手に深く入り込んで、奥の集落は遠くにかすかに望見出来た。

食べ物がなくとも、水さえあればあと何日かは身体がもつはず。恐ろしいのは同胞が氣力をなくすことだった。

日本人を包んでいるこの静寂と放心状態、とにかく何かをしなければ完全に参つてしまう。佐藤さんに次の連絡をしてもらった。「今日はここで野宿する。あと三八度線まで大体五里、明日の午後には三八度線に入れる。次にまた物をとられる恐れがあるので、皆で荷物の整理をしよう。大事な物は一番下に、金の品は必ず身につけておくこと……」。

言葉自体全く力がなかったが、放心から救うのには効果があつた。

寒い。夜半、身体が震えて目を覚ました。夜明け近くになると、寒気が一段と増し我慢出来ない。そして漸く道が判るようになる、みんな荷物を背負つて歩き出した。

自分は最後尾を歩き、「前の人と離れないように……」と幾度

も声をかけた。

しかし最初は家族毎に固まっていたのが、一人離れ二人離れしてバラバラになり、各自が自分の体力に応じて歩いている。恐らく自分の事しか、いや自分のことさえ考える余裕がないのかも知れない。

雑木林の下を通つた時、荷物が二個転がっているのに気付き、誰か休んでいるかも知れないと思つて土手を上がつてみた。

こんな低い枝で……と不思議なくらい低い枝で、老人が首を吊っていた。根元には老婆の死体が転がっていた。

一度に歩く距離がだんだん短くなっていることも、歩く時間と休む時間が大差がないのも充分意識していた。入江の奥の集落を過ぎると道端に座り込み、声をかけても全く反応をしめさない人達も現れ始めた。

この状態ではまた死者が出る、先頭を止めなくては……と思ひ、必死に足を速めた。入江を離れ一つの岡の上に来ると、数人がまだ先を歩いている。「おうい、止まれ」。大声で叫び追いつくと腰をおろした。

入江から三八度線まで四キロ、もう一キロ以上入つたのであと三キロ弱と判断した。日没まで時間はたっぷりあるし、ここで一団にならないと三八度線を越えるのは難しいだろう。最後の人が辿りつくまで小一時間もかかった。午後二時前、「出発します。峠まであと三キロありません。今まで二〇キロ（実際は

十三、四キロ）歩いたのであと少しです。頑張りましたよ。この辺りから警備が厳重になります。絶対バラバラにならないこと、疲れた人は言っておき。みんなで一緒に休みます」と大声で叫んだ。とにかく三八度線まで連れて行く事だと考え、境界線に二キロの無人地帯があり、南鮮の村まで更に十キロ近くあるとはとても言えなかった。

登り坂になるとみんなの歩く距離は極端に縮まり、五メートル歩いては立ち止まり、三メートル歩いては呼吸を整える状態になり、遂には全員歩いているのか休んでいるのか判らない。

二、三步足を動かしては休み、また歩き出すという具合だった。急坂を登りきると山の鞍部三八度線が目前にあった。もうすぐだ……。

突然、行く手の茂みからソ連兵が飛び出し、何か叫んだ。自動小銃を構えている。みんな本能的に両手を上げた。北鮮の収容所に逆戻りさせられる……。何かを訴えようとしたが言葉が出てこない。思わず「タバアリッシ（同志）、我々はヤポンスキー（日本人）だ」と叫んだ。

「ヤポンスキー?」「ヤアヤポンスキー」

三人のソ連兵が相談している。そして御定まりの略奪。彼等は衣類には目もくれず、指輪、時計などを徹底して探していた。全員の検査が終ると、南に行くよう身振りをした。

解放だ。みんなこんなに元気があったかと思うほど早く歩い

た。陽は沈みかけていた。漸く稜線に出、鞍部を越えて間もなく、大きな看板が道をふさいでいた。

「北緯三八度、無人地帯、立入禁止」。ハングル文字の間に書かれている漢字の拾い読みで判った。

無人地帯なら安全のはずだ……。みんな躊躇なくバラ線をクリックして暫く進み、灌木の生えている窪地を見つけると、申し合せたように座り込んだ。

安東を出発して十二日、飢えと渴き、寒さと疲労の連続だった。そして八名の死者を出しながらも遂に三八度線に辿りつき、いまその上に腰をおろしているのだ。

故国日本はどうなっているだろう。そして帰国後の生活は……。ふと脳裡を横切った。

しかし、今はそれより野宿に少しでも適当な場所、枝の密生した灌木の下を探るのが先決だった。

#### 追記

私達は、翌日南朝鮮の集落に入り、土間の倉庫に起居して、約二週間救出船の到着を待ち、更に京城・釜山の各収容所を経由して佐世保に引揚げました。

上陸は十二月十二日、安東を出発してから実に五日目の事でした。